



Title	「夢と幻滅」の主題によるバリエーション : Keatsの憂愁とその発展的内面形式について
Author(s)	竹中, 靖治
Citation	大阪外大英米研究. 1964, 4, p. 13-33
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/98951
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「夢と幻滅」の主題によるバリエーション

— Keats の憂愁とその発展的内面形式について—

竹 中 靖 治

I

G. H. Garrod はその *Keats* において⁽¹⁾, And can I bid these joys farewell?/Yes, I must pass them for a nobler life,/Where I may find the agonies, the strife/Of human heart. という一節を *Sleep and Poetry* から引用し, Thus early does he feel himself summoned out of his proper world... it is proper, here and now, to mark in him this fitful setting of his temperament towards a world where I conceive him to have, in fact, very little business, a world which touches our world, the crying and striving of our politics, our social misery. と Keats を評し, さらに別の箇所での詩人が *The Fall of Hyperion* において Moneta に語らせている自己批判の言葉, Thou art a dreaming thing,/The fever of thyself ; think of the earth. について, これは詩人の最後の言葉であっても彼の心の奥底を物語ったものではなく, 詩人のこうした現実社会への関心は多分に同時代の革命的良心の影響によるものだとしている。Keats は又生来感覚性の顕著な詩人であったことは余りにも明白であるが, この資質と並んで哲学や思想についてそれらの価値を専ら真と美との関連において, 時にそれを容認し, 時にそれを疑い, 又時にそれに反撥しながら, その短い生涯の殆んどを通じてともかくも強い関心を示していることはその書簡により容易に認め得るところである⁽²⁾。Garrod はこう

(1) G. H. Garrod, *Keats* (1939), I, pp. 26, 29

(2) 参照書簡番号:31 (Nov. 1817), 32 (Dec. 1817), 42 (Jan. 1818), 62 (Apr. 1818), 64 (May 1818), 115 (Mar. 1819), 123 (Mar. 1819), 128 (Jun. 1819), 137 (Jul. 1819), 156 (Sept. 1819). (書簡番号は M.B. Forman 編の第四版による)

した感覚に基く想像力が喚起するところの美的陶醉境に対する現実、直覚的世界と推論的世界のこの詩人の内部における二律背反的現象について、precisely in this vacillation between the senses and mind, lies not his strength, but, as I think, his weakness. と述べている⁽³⁾ のであるが、今筆者の問題の核心とするところも実にこの点についてなのである。即ち Keats が現実社会への関心のために捨て去らなければならないと考えた 'Pan' と Flora' の領域だけが Keats にとって真に固有 (proper) なものであったろうか、又ここに指摘されるような思想内至は哲学に対するこだわりが詩人の内部に起す動揺 (vacillation) が真に詩人の弱点となっているだろうかということ、換言すれば Keats の実現や哲理への関心が果して Garrod がいうように無用の手出しであったろうかということである。

II

様々な性格の人間が織りなす波瀾万丈の世界をリアリスティックに描くことを我々は通常浪漫派の詩人に求めはしない。「彼は未だかつて描写するということを行なひ得なかつたのである」というジイドがドイツ人の典型的精神について語った言葉は、成程ノヴァーリス的無限衝動を生命とする詩人には当てはまるかも知れないが、多く現実との連がりにおいていわゆる 'vision' を持っていたイギリス浪漫派の詩人にはその儘適用され得るものではない。然しそれにしても何を言い得ることは彼等の本領が依然として主に M. Bowra のいわゆる 'complexities of urban sophistication'⁽¹⁾ に侵されないところに確保されているということであろう。そしてこのことは Keats の場合も全く例外であるとはいえないのである。彼が如何に drama, 即ち 'the playing of different Natures with Joy and Sorrow' の素晴らしい世界の価値を、Shakespeare を読み、名優

(3) *ibid.*, II, p. 35

(1) Sir Maurice Bowra, *The Romantic Imagination* (1957), The Romantic Achievement.

Kean の演技を通して認め且つそれに憧れようとも、詩作という実践の場において浪漫派詩人としての自己の資質を欺くことはできないのである。Keats が Shakespeare の drama に魅せられたのはあく迄芸術美として昇華された人間性に他ならなかった。それは Keats がこよなく愛した感覚美と同じように典型に迄高められた様々な人間像が織りなす美の世界として彼の心を捉えたことであろう。然しながらそうしたいわば Shakespeare という偉大な個性を通して美と真実として理想化された人間性はその原型である現実社会の生身の人間達の姿の中に見出されるものではない。こうして drama の偉大な美によって励まされ、そのような美の創造のため現実社会に降りてゆく必要を感じた時、この詩人の浪漫的気質の中にデレンマが始まる。詩人のこのような精神的悩みの性格は Garrod も指摘したように現実への共感を要請するところのヒューマニズム的革命精神を内包する浪漫主義美学の自己撞着を物語っているといえる。Keats が *Scenery is fine—but human nature is finer.*⁽²⁾ というのは全く不思議ではないが、それから九ヶ月後の書簡に、*I admire Human Nature but I do not like Men.*⁽³⁾ と洩らしているのは浪漫主義精神の現実に対する反応の仕方をよく表わした言葉であるといえる。Keats は *I never try to be in the right.* と自らいっている位であるから、*I am more at home among men and women.*⁽⁴⁾ と自己撞着の言葉を語っていることを性急に咎めることはないが、この矛盾を裁く権利が我々の側にあるとすれば、*'I am more at home among men and women!'* The truth is that, say what he may, the least breath of character or action, suffices at any moment to dissolve the fabric of his imaginings. という Garrod の焦立ち⁽⁵⁾ は大方正当なものといえるのである。

ところで G. W. Knight などが指摘するように⁽⁶⁾、Keats にはその感覚と想

(2) Letter 25 (Mar. 1818).

(3) Letter 102 (Dec. 1818).

(4) Letter 166 (Nov. 1819).

(5) *ibid*, III, p. 56.

(6) G. Wilson Knight, *The Starlit Dome*, p. 274.

像の美的陶醉に混って「憂愁」の陰が絶えずつまとっていることを見逃すわけにはゆかないであろう。そしてこれは時代的なヒューマニズム精神の要請からであれ、個人的な性格や体質の生活体験との関連からであれ、上述したような想像の世界においてのみ真実な美として輝く人間性に対置せられて認められる生身の人間乃至は人間社会の不完全さ醜さが痛切に詩人の心に刻み込まれたことによると考えられる。二十歳台の初期中期という青春の真只中において、
You perhaps at one time thought there was such a thing as Worldly Happiness to be arrived at... I scarcely remember counting upon any Happiness—I look not for it if it be not in the present hour—nothing startles me beyond the moment. The setting Sun will always set me to rights—or if a Sparrow come before my Window I take part in its existence and pick about the Gravel. The first thing that strikes me on hearing a Misfortune having befallen another is this. ‘Well it cannot be helped—he will have the pleasure of trying the resources of his spirit’ であるとか、I have this moment received a note from Haslam in which he expects the death of his Father... This is the world—thus we cannot expect to give way many hours to pleasure—Circumstance are like Clouds continually gathering and bursting—while we are laughing the seed of some trouble is put into the wide arable land of events—while we are laughing it sprouts it grows and suddenly bears a poison fruit which we must pluck...⁽⁷⁾ というようなペシミズムは特にこの詩人に見られるような感覚的快樂に対する貧乏さと一見矛盾したものに思われるのであるが、そうした世界における陶酔的な美の強烈さが又常に想像の中に完全な美の世界を創るが故に現実社会の不完全さ醜悪さが一層痛切に感じられたものとも解されるのである。

Keats における「憂愁」についてはもう一つの観点が得られよう。それは上述した「現実」との関連の他に、感覚と想像という詩人にとって固有の能力である直覚的認識に対する推論的認識による所与の価値を Keats が全然無視し得なかったことから、そういう彼にとって多かれ少なかれ疑わしい価値の世界

(7) Letters 31, 123.

が彼が感覚と想像の美の世界に安住するのを妨げ、又詩及び詩人というものの価値に対してそういう側面から一種の脅威を常に感じないわけにはゆかなかったという事実である。この第二の観点に関しては、それ迄のいわゆる「理性の時代」の価値観が支配的にこうした認識形態に基いていたことを考える時、このような Keats の反抗や迷いも歴史的な意義を帯びるのであり、それは又同時に、この詩人が書簡の中でしばしば自身との比較や批判の対象にしている Wordsworth や Coleridge の哲学者乃至は道徳家的側面において、又友人 Dilk において彼が見出しているように⁽⁸⁾、人間精神の本質的対立要素として認識論にも連がりを持ってくるのである。

理想と現実の相剋という問題は勿論いわゆる浪漫主義的精神にのみ特有なものではないが、「ヴェルテル」「ヌヴェル・エロイーズ」「オーベルマン」それに「アタラ」「ルネ」など浪漫的精神の中の美意識の系譜には何等かの「憂愁」の感情が優勢であり、又夫々独自の美的世界としての価値を有するものであるが、Keats の深く烈しい憂愁感もこうした浪漫的気質の一つの典型と見なすことができよう。そして、*Ay, in the very temple of Delight/Veil'd Melancholy has her shrine ...*⁽⁹⁾ というこの詩人の憂愁崇拜は晩年のゲーテがヴェルテル的世界に病的なものを見たのと同じ意味において批判されるべき性質のものではあっても、他方この憂愁の情が人間生活の幸・不幸という両極の意識に根ざした大きな感動の振巾を伴って詩人の創造的エネルギーを掻きたてていることに注目しなければならないであろう。Keats 自身は自分の詩魂が最も創造的な状態にある時にはこの憂愁が苦痛に迄感じられるとしてそれを *'wakeful anguish of the soul'*⁽¹⁰⁾ と呼んでいるが、事実彼の最も成功していると思われる作品や個々の詩句においては殆んど常に夢乃至は陶酔の幻滅乃至は破壊的要素として、何がしかの憂愁や苦痛を伴った現実乃至は哲理が描かれているの

(8) Letters 32, 44, 64, 156, etc.

(9) *Ode on Melancholy*, III, ll. 5-6.

(10) *ibid.*, I, l. 10.

が認められるのである。そしてこれは正に Keats がその *Ode on Melancholy* でうたっていることがらに他ならないのである。つまり憂愁の情は四月の雨が春の草花を活気付けるように詩人の創造力に生氣を与えるのである。

III

浪漫派詩人としての Keats には意外に純粋に抒情詩と目され得るものは少なく、反って物語詩が質的量的に大きな比重を占めているのが認められるが、その中で上述したような詩人の深い憂愁の情が何等の形で投影されているのが *Endymion*, *Isabella*, *The Eve of St. Agnes*, *La Belle Dame Sans Merci*, *Lamia*, 二つの *Hyperion* 等の諸篇であると考えられる。そしてこれ等一連の詩篇を通じて見られる顕著な事実、その一つ一つにおいて例外なく感覚と想像の世界を代表する夢や陶酔の幸福感が、ある時には「現実」により、ある時には「哲理」により破られたり殺滅されたりするという、いわば「夢と幻滅」の主題に貫かれているということである。Keats はその浪漫的精神の現実や哲理に対する特有な反応の仕方をこれ等一連の詩をそれだけの数のバリエーションとして象徴化したといえるであろう。この相対立する二つの主題がもたらすところのいわばソナタ形式的な緊張の効果はそのまま詩人の内部の二律背反の抗争のエネルギーを詩的造形に結び付けるところの一種の構造的価値を作り出しており、それがplotの進行や character 造形上の弱みをカバーして、これ等の詩に独自の性格と価値を与えていると判断されるのである。それは云い換えると、第一に、喜ばしいものと忌むべきものとが交錯するか又は隣接し合って一つの sequence をなす時の緊張が詩句に与える一種の迫力や烈しさのことで、これこそ Keats 自身があらゆる芸術作品の卓越性の要素として考えていたものに他ならないし、自作品の *Isabella*, *The Eve of St. Agnes* 及び *Lamia* の相対的評価において *Lamia* をその故に最も高く買った理由でもあった⁽¹⁾。そして第二には、消局的な効力であるが、詩人が物語りの進行上のバランスを破り興に乗って本筋か

(1) Letters 32; 152, 156.

ら逸脱したり、部分的な冗漫に陥いることがあっても、この主題性のために物語りとしての著しい自己撞着から守られているということである。

例えば、*Endymion* の Book I, Book II, Book III の夫々においては *Endymion* と *Phoebe*, *Venus* と *Adonis*, *Glaucus* と *Circe* という組合せで情交が語られているが、それ等のいずれにおいても、先づ恋人が眠りか陶醉に入り、暫し感覚的逸楽境を味わった後、やがて多かれ少なかれ忌むべき世界に目ざめるという経過を辿るのである。そしてこういう型の sequence は *The Eve of St. Agnes*, *La Belle Dame Sans Merci* そして *Lamia* についても例外ではなく、又 *Isabella* の場合もヒロイン *Isabella* の青年 *Lorenzo* に対する恋情が夢であり、*Lorenzo* の横死が幻滅であると考え得るならばこれも全くの例外と見なすことはできないであろう。これら一連の物語詞の評価に当って最少限度の主観は問題の性質上不可避であるが、今筆者に一つの基準となるものはこれ等の詩篇において「現実」乃至は「哲理」に対する対決意識が如何なる形をとっているか、幻滅感がどれ程強く表われているか、という点である。そしてこの場合、最も重要な観点は *Keats* が「美」乃至は「詩」と「現実」乃至は「哲理」との間に起る二律背反的問題を如何に論理的に処理し得たかということではなくて、そこに根を持つ憂愁の情が苦痛に迄激化した時、それが詩人の感情に点火することによって詩人の筆に如何なる詩を書かせたかといこと、換言すればこのような内面的苦しみが単に *Keats* の詩人としての弱みとなるのではなくて反って彼の詩に何等かの積局的な価値を生ませているのではないかを探って見ることである。

IV

H. Read は *Endymion* を技巧的側面から捉えて⁽¹⁾、その全体としての欠陥を 'diffuseness' 又は 'verbal excess' にあると見るのであるが、そういう指摘

(1) Herbert Read, *The True Voice of Feeling*, Chap. III, The True Voice of Feeling: Keats.

にも係わらず、夢が現実的要素によって破られるという危機的場面においては
屢々白熱的な詩的イメヂャリーの輝きを見せるのである。例えば Book I に
おいて Endymion が甘い夢から眠りにおち、微かな物音に目ざめて見ると恋人
Phoebe が去り、今迄の暖い空気や藁の香りも失せてしまっているという幻
滅の痛みを描写したところでは、

Ah! my sighs, my tears,

My clenched hands;—for lo! the poppies hung
Dew-dabbled on their stalks, the ouzel sung
A heavy ditty, and the sullen day
Had chidden herald Hesperus away,
With leaden looks : the solitary breeze
Bluster'd and slept, and its wild self did tease
With wayward melancholy ; and I thought,
Mark me, Peona ! that sometimes it brought
Faint fare-thee-wells, and sigh-shrilled adieus! —
Away I wander'd—all the pleasant hues
Of heaven and earth had faded : deepest shades
Were deepest dungeons ; heaths and sunny glades
Were full of pestilent light ; our taintless rills
Seem'd sooty, and o'er-spread with upturn'd gills
Of dying fish ; the vermeil rose had blown
In frightful scarlet, and its thorns out-grown
Like spiked aloe...(2)

という風であり、又 BookIV の Endymion を慰さめるインド少女の roundlay
では少女の悲哀に託される詩人自身の感情と Bacchus の陶酔的陽気さが絶妙

(2) *Endymion*, Book I, ll. 681-698.

の韻律に乗って一巾の活画のような効果を生んでいるのが注目される。ここではその極く一部分を掲げよう。

“O Sorrow,
Why dost borrow
The natural hue of health, from vermeil lips?—
To give maiden flushes
To the white rose bushes?
Or is it thy dewy hand the daisy tips?

“O Sorrow,
Why dost borrow
Heart's lightness from the merriment of May?—
A lover would not tread
A cowslip on the head,
Though he should dance from eve till peep of day—
Nor any drooping flower
Held sacred for thy bower,
Wherever he may sport himself and play.

“To Sorrow,
I bade good-morrow,
and thought to leave her far away behind ;
But cheerly, cheerly,
She loves me dearly ;
She is so constant to me, and so kind :
I would deceive her
And so leave her,
But ah! she is so constant and so kind.

“Whence came ye, Merry Damsels! whence came ye!

So many, and so many, and such glee?

Why have ye left your bowers desolate,

Your lutes, and gentler fate?—

‘We follow Bacchus! Bacchus on the wing,

A conquering!

Bacchus, young Bacchus! good or ill betide,

We dance before him thorough kingdoms wide :—

Come hither, lady fair, and joined be

To our wild minstrelsy!’⁽³⁾

これ等の例においてはこの長篇の他の大きな部分を占めるいわば水増ししたような装飾的冗慢さは大方影を潜めているのであるが、このように効果ある詩句が局部的に時々現われることによって本篇は全体としての登場人物の性格の茫漠さや筋運びの悪さをどうにか持ち耐えているといえよう。

Isabella については先程触れた通り、*Isabella* の恋と *Lorenzo* の死によって「夢と幻滅」の主題性を認めることができるのであるが、作者自身の ‘sober-sadness’, 友人 Reynolds の ‘quiet pathos’ という評語⁽⁴⁾ が示すようにその世界は ‘exquisite sense of the luxurious’⁽⁵⁾ が支配して現実との露わな対決はわざと回避されている感があり、死に対する嘆きの感情も穏やかな一種の ‘pleasing woe’ となってほのかな暖かさ (tenderness) を湛えている。然もなをそのような全体としての印象にも係らずこの主題に貫かれていることの不可避的な性質上、「愛と死」乃至は「死滅と生育」との関係から生ずる緊張力を物語る詩行に全く欠けているわけではない。例えば殺された *Lorenzo* が幻影(vision) となって *Isabella* の寝室に現われる場面では、

(3) *ibid.*, Book IV, ll. 146-151, ll. 164-172, ll. 173-181, ll. 118-127.

(4) *Letters* 152, 90.

(5) *Letts* 62.

Lorenzo stood, and wept : the forest tomb
 Had marr'd his glossy hair which once could shoot
 Lustre into the sun, and put cold doom
 Upon his lips, and taken the soft lute
 From his lorn voice, and past his loamed ears
 Had made a miry channel for his tears.⁽⁶⁾

という描写が見られ、更にその先で死者の感情を述べた stanza では度々死の観念に憑かれていた Keats の底深い憂愁感が裏付けとなっている結果、鬼気迫る真実の言葉が Lorenzo の口を通して語られる。

"I am a shadow now, alas! alas!
 Upon the skirts of human-nature dwelling
 Alone : I chant alone the holly mass,
 while little sounds of life are round me knelling,
 And glossy bees at noon do fieldward pass,
 And many a chapel bell the hour is telling,
 Paining me through : those sounds grow strange to me,
 And thou art distant in Humanity."⁽⁷⁾

Isabella よりおよそ一年後の *The Eve of St. Agnes* においては、やはり Keats 自身の評語がそう受け取れるように、*Isabella* の場合同様詩人の心を占有するのは感覚的快楽であり、その点ではやはり Keats 独特の感情や気分の表現が成し遂げられていることは否めないわけであるが、「夢と幻滅」の主題を適用し得ることは本篇においても変わらず、ここではそれは二人の恋人達が窓を打つみぞれの音に目ざまされるという過程を辿ることによって表わされる。然しこの二人の最後の行動が現実の回避であることによって、一方においては

(6) *Isabella*, X X X V, ll. 275-280.

(7) *ibid.*, X X X I X, ll. 305-312.

夢の不完全な燃消があり、他方において現実の消局的な容認があると云ういわば「夢と幻滅」の主題性の稀薄さにより、渾然とした効果に少々欠けるところがあると認められ、Garrod のいう Keats の現実への関心のための弱さが表われている一例だと思われるのであるが、その弱さはむしろ上に述べた幻滅の不徹底さ、微温的な現実意識、それを裏返せば夢への執着の浅さ、から生じたものであると判断される。そうした弱さは Keats 自身の言葉を借りるならば、*Its (i. e. poetry's) touches of Beauty should never be half way thereby making the reader breathless instead of content.*⁽⁸⁾ という詩の理想的効果からも窺われるものであろう。

こういう弱点を持つ *The Eve of St. Agnes* とその幻滅の仮借なさによって著しく対照的に迫力を見せるのが *La Belle Dame Sans Merci* であり、そして又 *Lamia* であろう。前者における幻滅の痛みは、恐らく Fanny Brawn に対する激しい恋情と自己の肺患とが辿る運命の予感が中心となっていることにより著しく Keats 個人のものであると認められるにもかかわらず、そういう個人的感情に埋没せずによくそれを詩的創造として昇華し得たことは詩人の並々ならぬ強固なアーティストの精神を証するものであろう。そしてこの詩での Keats の完璧性の秘密は、それがともすれば浪漫的精神の不得手とする人間の行動や性格というリアリスティックな世界に少しも侵蝕されていないという消局的な保証の他に、「夢と幻滅」の主題がぎりぎりに切り詰められて使われている結果、そこに凝縮の力が生れていると云うことであるが、その背後には勿論無駄口を排してこのような簡潔な形式を求めさせたところの（幻滅の痛切さを噛みしめた詩人の心が）あったといえよう。

Ode to a Nightingale の終結部に anticlimax のみを見る人は Keats 的美の世界が現実意識により破られるを好まぬ人であろう。然しその部分において詩人が述べていることは好むと好まざるとに係わらず一つの真実に他ならな

(8) Letter 51.

い。即ち、

Adieu! the fancy cannot cheat so well
As she is fam'd to do, deceiving elf.⁽⁹⁾

と多少の自虐の念に襲われながらも想像力の本質を発いて見せる Keats の現実
に立ち帰った心がここに示されている。この ode の浪漫的な標題にも係ら
ず、この詩に表白されている詩人の心は決して単純な夢でも又幻滅の嘆きでも
ない。先づ Bacchus の力により、次いで 'Poesy' により悲惨な現実を逃れん
とする詩人は死をもそのための最高の境地と感じて、

...more than ever seems it rich to die,
To cease upon the midnight with no pain...⁽¹⁰⁾

とうたうが、直ぐに詩人の現実意識はそういう自分の声の虚妄を、死が現実
に何を意味するかというを詩人に悟らせることによって、打ち砕いてしまうので
ある。即ち、

Still would thou sing, and I have ears in vain—
To thy high requiem become a sod.⁽¹¹⁾

ここに見られるような想像力の本質洞察はすでに詩人がその手紙の一つに述
べている通りであるが、このような虚妄を誘った 'fancy' を 'deceiving elf' と
呼ばざるを得ないところの現実意識によって覚醒した心の痛みが別に詩人が名
付けるところの 'wakeful anguish of the soul' に他ならないのである。ここ
では「幻滅」の主題は第Ⅲと第Ⅳ stanza の末尾から最後の stanza にかけて
明瞭に現われているが、それは、それに混って屢々顔を見せる *Endymion* 的世

(9) *Ode to a Nightingale*, VIII, ll. 73-74.

(10) *ibid.*, VI, l. 55.

(11) *ibid.*, VI, ll. 59-60.

界の 'luxuries' との間に複雑な対比の緊張を与えることによりダイナミックな感情のパノラマ的世界を展開して見せるのである。ただここには後述する *Lamia* における程の二つの主題の凄烈な噛み合いがない点未だ 'luxuries' への憧れが呼び起す逃避的な感情への傾斜があり、従ってその美的性質においては先の *Isabella* や *The Eve of St. Agnes* の世界に近いものだといえよう。このような 'luxuries' が一種の 'perversity' に迄押し進められて真実性から逸脱していると思われるのが *Ode on Melancholy* であろう。そこで詩人は憂愁の感情を愛溺し、それに弄ばれる余りメランコリ神社の生贄となることをさえ願うのである。この詩の弱点は斯上の観点からすれば結局「夢」という単一の主題の提示によりそれが特殊な一面的世界をしか描いていないことに求められよう。

それは *Ode to a Nightingale* の複雑さを内包する統一性に欠けていること、換言すればこの優れた ode の中の例えば第Ⅱや第Ⅴ stanza だけに描かれているような、いわば部分的世界をしか描いていないということであって、部分的には価値ある詩句を有するにも係わらず、その問題性は別として、Keats の ode の中では minor なものの系列に入れられるべきものであろう。

Ode on a Grecian Urn は難解な詩である。その理由の一つはこれ迄観察してきた諸篇とは異って、ここでは「夢と幻滅」の主題性を余り明瞭に把握し得ないということでもあろう。この ode の背後に感じられる詩人の心の落着きは前の二つの ode の動的な感情の世界とは対照的である。そして、そうした落着いた心境を物語るものとしてはこの ode の創作時期の一、二ヶ月前に書かれた手紙が手係りとなるであろう⁽¹²⁾。その要点の第一は現実社会の諸関係を無私無欲の公平な (disinterested) 立場から観照するという理念の象徴としての 'speculative mind' を認めたこと、第二にはそうした観点が詩人の創造活動を有効ならしめるためには一度詩人は現実の多様性を体験しておく必要のあることの痛感、第三にはそうした体験の場において生じる苦しみが無意味なものではなくて、逆にそれが人間の魂造りに必要であるという、いわば苦しみの

(12) Letters 123 (Apr. 1819).

効用乃至は正当化の理念を打ち出していることであり、そしてこの最後の「魂」とは、要するに詩人にとっては極限に迄発展せしめられた個性であると解釈し得るのである。然しこのような心境への到達が直ぐに詩人の感情を支配するまでにはそれはなお *Ode to Psyche*, *Ode to a Nightingale*, *Ode on Melancholy* に見られるような想像や感覚の美的世界への憧れや逃避的な感情の迂余曲節を経なければならなかったものであり、再び逆戻りすることない確固とした現実対決への気持を得る迄には詩人はこの「ギリシャの古壺」の暫時の平静を去って再び *Lamia* の激しい感情の世界をくぐらなければならなかったのである。

Lamia は例えば *La Belle Dame Sans Merci* などに比べるとそれ程の渾然とした芸術的昇華と直截に訴える力を持たないが、それだけ反って作者の問題意識を露わに感じさせるため斯上の論点から注目すべき性格を具えている。即ちこの作品はそこで「詩と哲理」という Keats にあってはその憂愁の中核をなす問題が「夢と幻滅」という対立要素として正面からぶつつけ合わされているためか、これ迄に見られなかった新しい力を獲得しているのが認められる。それはここで始めて、たとえ曲りなりにも物語詩としての基本的要件である性格付けが筋を引き出しているということを認め得る点にある。つまり蛇性の美女 *Lamia* は *Lycius* を欺くという罪により、*Lycius* はそうした *Lamia* の正体を見抜き得ず盲目的な愛情の奢りに耽るという罪により、そして哲学者 *Apollonius* は非情冷酷という罪により、夫々の要素が絡み合って不可避免的に破滅的結末に進んでゆくのである。それは又構成上からも *Endymion* におけるようなたどたどしい筋の進展から大きく進歩した凝縮の力を見せ、又個々の詩句に見られた冗漫さをほぼ清算し、より厳しい美と真実に達していると考えられる。そして今こうした新しい価値が何処からもたらされたものであるかを考えると、素材的又詩技巧的な面での *Burton* や *Dryden* の影響を無視できないのであるが、より本質的な連がりには先に触れた手紙の中に見られる境地、即ち 'speculati ve mind' によって意味されるところの 'disinterested' な立場の体得であろう。「詩と哲理」の相対的な意味は先にも触れたように認識論の本質に連がる問題でも

あるが、Keats がこの作品を通して表わそうとしているものはそういう問題の表面的な解決や二者撰択についてではない。然し又美の象徴としての Lamia が哲学者 Apollonius の眼力に射られて死に、Lycius 又その後を追うという結末は H. Ford がいうように⁽¹³⁾ Keats の夢に対する執着心の最後の清算を物語るものでもなければ、これとは逆に M. Allott が説くように⁽¹⁴⁾ これを Keats の美のための殉教的な弁明であるとするのにも疑問がある。前者は Lycius の Lamia に対する愛情と Apollonius に対する烈しい怒りからして不自然な見解であり、後者は Do not all charms fly/At the mere touch of cold philosophy?⁽¹⁵⁾ という句を中核とする moral の部分を全体とのバランス上妥当と思われる以上に重視した結果の見方であると考えられる。S. Colvin は別の立場に立っていて、この moral が作品全体が与える印象との間に惹き起す困惑を訴えている⁽¹⁶⁾ が、これはもっともな反応であるといえよう。事実この部分は作品の統一からはみ出したものであり、これはそれ迄の詩人の心を占めていた夢への執着心の遠い筈のようなものが詩人の心の隙間にふと露わな声となって現われた程度のもものと解されよう。Keats 自身がこの作品には 'fire' があるとして *Isabella* や *The Eve of St. Agnes* よりも高く買っていることについては既に述べたところであるが、そういう言葉がよく表わしているこの作品の一種の迫力は、あく迄も自分個人の苦悩であるこの二律背反的な内面の抗争をも、詩人自身が手紙の中で巧みなたとえとしていっているように、「路上の喧嘩」に惹きつけられるように、それを一つの 'amusement' として自己の 'speculative mind' を以て眺め得たということにより生れたのではなかろうかと思われる。ここには決して Allot や Ford の考えるような一方的な美乃至は詩のための訴えや、それとは逆の美への執着心の放棄による哲理の全面的な承認、といったものは

(13) N. F. Ford, *Keats's Pre-figurative Imagination* (1951), p. 103.

(14) John Keats, ed. by Kenneth Muir (1959), '*Isabella*', '*The Eve of St. Agnes*', '*Lamia*'.

(15) *Lamia*, ll. 221-238.

(16) Sidney Colvin, *John Keats, his Life and Poetry* (1920), p. 408.

ない。‘speculative mind’ とは人生の諸関係に対する片手落ちでない広い視野と解されようが、この作品の新しい意義、と同時に価値、は Keats がここで美にも哲理にも夫々それなりの所を得させているということによって、専ら ‘Flora’ と ‘Pan’ の領域により本領を発揮してきた彼としては画期的ともいべき精神的成熟を示していることにあろう。美の象徴 Lamia の破滅の意味はかつて ‘jack-o’-lantern’⁽¹⁷⁾ と見なされ又 ‘deceiving elf’ と呼ばれた ‘fancy’ の本質洞察であり、一方 Apollonius により象徴されているものはこれ又幻滅的 agent としての哲理が美との関連において有する真実の一面の扶出であるだろう。そしてこのようなより広い世界との関連から捉えられた美、即ちこの蛇美女、の命はより果なく脆いが故にこそ反ってその美しさは妖しい迄の輝きを帯び、「夢と幻滅」の主題に乗ってもつれあうのである。以下のそうした例の一部は Keats がかつて ‘sorrow’ と ‘joy’ を区別できぬと洩らした時の典型的に Keats 独自の、又同時に浪漫的な美意識の世界と考えられる。

She was a gordian shape of dazzling hue,
Vermilion-spotted, golden, green, and blue ;
Striped like a zebra, freckled like a pard,
Eyed like a peacock, and all crimson barr'd ;
And full of silver moons, that, as she breathed,
Dissolv'd or brighter shone, or interwreathed
Their lustres with the gloomier tapestries—
So rainbow-sided, touch'd with miseries,
She seem'd at once, some penanced lady elf,
Some demon's mistress, or the demon's self.
Upon her crest she wore a wannish fire
Sprinkled with stars, like Ariadne's tiar :

(17) Letter 53

Her head was serpent, but ah, bitter sweet!

She had a woman's mouth with all its pearls complete...

かくて *To Autumn* では、幻滅を通してより広い人間生活に対する視野に達した詩人の目は最早や 'Pan' と 'Flora' の神話的想像界の美しい自然にではなくて、Winchester のとある現実の stubble-field に向けられる。ここには単なる抒情的な叫びの稀薄さに取って代るところの堅牢な客観的肉付けに守られた個性味ある想像力が息付いている。然もなお注意深く観察するならば、ここにもやはり「夢と幻滅」の主題が微かな一条の光のように過ぎゆくのを我々は見逃さないであろう。自然の生命に対する詩人の惜別の情が一沫の愁いの陰となつて、I, II stanza の豊かで充実味のある 'luxuries' の後味を一層感じさせるのが最後の stanza にある「幻滅」の主題なのであり、それはアンリー・ゲオンがモーツアルトの音楽の悲しさを 'tristesse allante' という言葉で表わした時⁽¹⁹⁾ のそれを思い出させる種類のものである。この詩の完成度こそは Keats 自身がこの時より一年半前詩の理想的効果について述べた axiom, 即ち the rise, the progress, the setting of imagery should like the Sun come natural to him (i. e. the reader) —shine over him and set soberly although in magnificence leaving him in the Luxury of twilight.⁽²⁰⁾ が実現された稀有の一例といえるのではなからうか。

Lamia 的世界は詩人の disinterested な心が自己の苦悩を創造的に昇華し得たものであっても、そのこと自体は彼の内的苦悩の軽さを物語るものではない。*Lamia* で描いたような破局的結末が自己の精神に起ってはならないと詩人が感じた時、*Lamia* の創造を可能にした彼の成熟した精神はその苦悩の発展的解消が最早や感覚や想像の陶醉境への逃避による現実や哲理の放棄にではなくて、それ等との対決にあることを知っていた。*Hyperion* と *The Fall of*

(18) *Lamia*, ll. 47-60.

(19) Henri Ghéon, *Promenades avec Mozart*.

(20) Letter 51

Hyperion の二つの叙事的長篇は多分に人類社会の発展を信ずる革命的ヒューマニズムという時代精神の反映でありながら、同時に、前者においてこの世の最高支配者である美の神、即ち理想的詩人の象徴的存在、が 'knowledge enormous'⁽²¹⁾ の獲得により誕生し、後者において苦難に充ちた真の詩人への道程が現実社会への共感という方向に置かれていることにより、それ等はより多分に Keats 個人にとっての 斯上のような 核心的課題 追求の書であると見なし得よう。そしてこの両篇で特に注目されるのは、夫々において「夢と幻滅」の主題が明確に貫かれていることばかりでなく、これ迄観察してきた諸篇の場合とは異って、ここではこの主題性が新しくてより積局的な意義、即ち、美の神 Apollo の苦悩の中からの誕生と Moneta の承認による主人公 'dreamer' の半死からの救済という事柄が示すところの詩人の内部における 'die into life'⁽²²⁾ の体験、即ち Keats による現実直視への踏み切りの象徴的意義、を担っているということである。かくして、多くの場合、夢から幻滅へという過程の sequence として繰返えされてきたこの主題性はここにおいて詩人の脱皮と発展への方向付けという建設的な意義の表現として構造的な価値を具えるに至ったのである。そしてこれ等両篇の未完の部分こそはこうして現実に降りていった Keats がそこでの何年かの体験の後書き得たかも知れなかったものなのである。

V

Lamia 及び数篇の ode の内容とその創作時期から考えて Keats が現実直視に最終的に踏み切ったのはこの年一八十九年の五、六月頃と推定される。そしてこれを裏書きするような言葉がその頃の手紙の幾つか⁽²³⁾ に発見されるのであるが、それ等は要するに詩人が彼なりの思索によって、青春のいわば盲目的美への陶醉からより大きな人生的視野へと脱皮成熟しつつあることを示しているといえよう。この年の詩人の旺盛な創造活動は R. Gittings がそれを 'living

(21) *Hyperion*, Book III, l. 113.

(22) *ibid.*, Book III, l. 130.

(23) *Letters* 128, 137.

year' と名付けるに適わしいものとしているが、それはやはり詩人の憂愁感情の中核をなしていた夢と幻滅の苦痛な迄の激突が彼の内部で創造的エネルギー化したことによると考えられよう。そして又、もし人生の意義や価値が青春、即ち詩人のいわゆる Chamber of maiden-Thought'⁽²⁴⁾、だけのものでないならば、Keats が自己の詩人としての発展方向を現実や哲理の何等かの形による克服の道に求めたということは全く正当であるといわざるを得ないし、もしそういう視野や洞察を得ていなかったとすれば、個人的感情に埋没せず、自己の苦悩をよく克服してこの最後の実のりの年を可能にしたところの強固なアーティストの精神も考えることはできないであろう。このような意味において、冒頭に掲げた Garrod の言葉のように、Keats は現実や哲理や思想への関心によって自らの弱点を作ったものであると考えることは結局 'Flora' と 'Pan' という狭い人間的世界での幸福安泰な青年詩人の完璧性への郷愁であるといわなければならない。然しもしそのような意味での完璧性をあく迄求めるというのであれば、「夢と幻滅」の主題性に侵されることのより少ない最初期の詩の世界、例えば *I Stood Tiptoe* や *On First Looking into Chapman's Homer*, などにこそ天真爛漫なより全き Keats の姿が見られると考えるのである。実際そういう点では *Endymion* さえ既に遅きに失するのである。然し、もしこの主題を通して詩人が試みてきた数々のバリエーションによるより大きく深い美と真実探求の過程に見られる精神的成熟がその時々詩に与えた価値と意義にわざと目をつむるのでなければ、又、特殊な領域に守られた完璧性だけが大切なのであって、精神的成熟はこの殻を打ち破らざるを得ないが故に、それなりに美しくはあってもやはり未熟と称さなければならない世界に恋々と執着するというのでなければ、更に換言すれば、より成熟した精神に対してより価値ある美と真実を訴えるために詩人が消化しなければならないものとしての現実社会の大衆的諸価値を代表する常識や制度や慣習やその他平凡な市民の感受性を満足させるとこ

(24) Letter 64.

ろの諸々の価値、それに勿論哲学や思想の理性的認識の所与—それを文学の中に求めるならば差し当って浪漫的 精神の極北的位置にあるところのいわゆる「理性の時代」の文学的所産—等々を全く無視し得ないならば、例えば *Lamia* に並べられた *Isabella* や *The Eve of St. Agnes* の世界は精々部分的な真実や不完全な美を表わすに過ぎないといえるであろう。Keats の創造精神を掻き立てた深い憂愁の底には、‘wonder’ という特殊な美的価値の世界に守られた浪漫精神の申し子としての資質をあくまで痛切に自覚しながら、同時にそうした世界の価値の得失や限界を本能的に見抜かざるを得なかったこの詩人の複雑で大きな個性を認めることができよう。彼がたとえより大きく深い人間世界の美と真を描いているとして自らも到達しようと試みた drama においてはその野心を遂げずに終ったとしても、そうだからといって、その現実や哲理に対する無関心は彼の美的世界をより完全なものとしたであろうと惜しむことは、既にその主要作品の大半の価値と意義を否定することであり、又そうした作品評価は一方的な趣味の袋小路に陥入っているといわざるを得ないであろう。